

“木の家づくり”から林業再生を考える委員会・報告骨子(2010. 3. 15)

現状認識と幾つかの問題提起（鳥の目と虫の目）

小池一三(町の工務店ネット代表)

1. 鳥の目で見ると日本社会に横たわる大問題／既存住宅の不適合問題

1980年の「省エネ基準」以前の住宅及び、耐震基準が盛り込まれた1981年の「建築基準法以前の住宅が、推定40～45%を占めている（【表 1.2】参照）。

- ①予想される大地震への備えという点で、
 - ②またCO2の25%削減目標を達成する国家目標の達成の上で、耐震・断熱について、既存住宅の不適合状態が問題視されている。
 - ①に関して、阪神淡路大震災の痛切な経験を繰り返さないために（近くはハイチ・チリ）
 - ②に関して、「ザル住宅」では太陽光発電を大量導入しても効果が薄いこと。ベースが問題。2000年→住宅品質確保法の施行。瑕疵担保期間の義務化と日本住宅性能表示基準の制定。2009年→長期優良住宅普及促進法の施行。→ **ストック型住宅への政策大転換**
- この流れは時代の必然。一方で現場は工務店の破綻、職人の手の劣化等、軋みが生じている。

2. 鳥の目で見るともう一つの大問題／国栄えて、山河なし →山河壊れて、国滅ぶ

- ①都市の病弊と農山村の疲弊。町並み景観・地域景観の混乱と破壊。
- ②都市も農山村も環境が劣化している。放置林＝養老流に言う「お手入れ」不足。
- ③都市と農村の行き交いの関係(参勤交代)。休暇分散化と高速道路無料化の関係。日本型クラインガルテン(あるいは日本型ダーチャ)の創出。週末休暇住宅・大地震の際の疎開住宅・定年後の「終の棲処」(一茶「これがまあ終(つひ)の栖(すみか)か雪五尺」)

3. 前原国交大臣への提言書【資料1】で問題にしたこと／実効性の高い「成長戦略」を

- ① 長期優良住宅は、本来、日本の将来を担う若年(低所得者)層に広く利用されるべき制度。低利・長期の住宅ローン／アメリカのプライムローンの影響でトーンダウン。クレジット(個人信用)を前提にしない、家族外にも引き継がれるモーゲージローンへ。最近の墓石に見られる現象＝「無縁社会」の進行。だれが老人を見るのか、という問題。住宅の検査・診断・資産評価制度と、保険・保証・金融制度の根本転換の必要。
- ②耐震・省エネなど問題視される既存住宅の大規模改修・改造をはかる課題。リフォーム(小規模な改修)・大規模改修・改造ローン・新築ローン・半定住住宅の4本立の制度化。
- ③荒れた森の状態、地域材の活用・省エネ化・自然エネルギーの活用の促進。

4. 虫の目で具体を考える＝新委員会への幾つかの問題提起

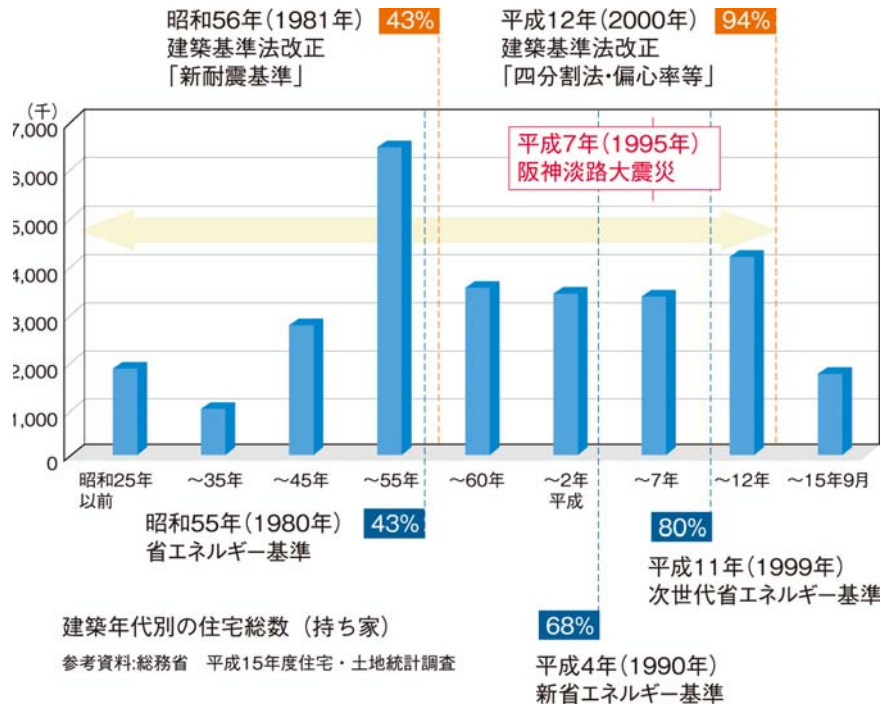
- ①都市と農山村との行き通いの関係をどう生むか。住民票・住宅ローンの問題とも絡む。
- ②この委員会のテーマと絡んで、山(森)の「出口戦略」を方法化する。
「林業再生プラン」の50%自給率への危惧。現場は数値目標の達成に走る可能性大。
どういう森(山)をつくるかが肝要なのではないのか。

町の工務店ネットでは、「木材を選ぶ基準」と共に、「**森を選ぶ基準**」を定めた。

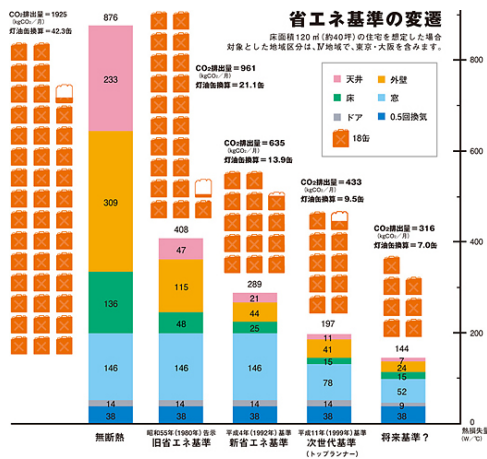
- ㊤放置(線香)林の森でないこと ㊦皆伐の森でないこと ㊧切り捨て間伐の森でないこと ㊨高密度作業路網に取り組む森であること。「100年の森をつくる」＝育てる林業へ。単に「地域材利用」を呼び掛けるだけでなく、地域に即した利用法を生み出す。

提案例＝㊤吉野の杉樽丸に代わる利用法／躯体と内装の分離。欧米のルーム的なあり方と違う日本の間仕切法(襖・屏風。鴨居・欄間等大工術も)の駆使、建具技術を利用した半製品化。㊦出雲における重ね木手法（【図1】本居宣長の『玉勝間』）／拡大造林を遅れて取り組んだ出雲は大径木材が少ない。しかし柱材は得られる。二本合わせれば梁材になる。和風にこだわる人には向かないが、魅力ある木の空間を持った住宅にすれば若い人の支持を得られる。㊧対馬檜を土台に用いる案／丸太を船で九州に運んでいる。緻密な材なので土台に向いている（島の仕事をつくり、かつての「対州檜」の復活をはかる）

【表 1】



【表 2】



【図 1】 出雲大社参道舗石に記された磐根（いわね）御柱（みはしら）

1.4m 3 柱の径は 3.6m 八足門の細かい建築の造り(詳しくは本居宣長『玉勝間』岩波文庫)

